浸透世界のデリット

夕闇終夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
浸透世界のデリット

【Ｎコード】
Ｎ６２４１Ｙ

【作者名】
夕闇終夜

【あらすじ】
《世界の終わり》と呼ばれる人類がホログラム化されるという異常現象――――災害が起きて数年。
突如ホログラム化された人類の前に現れた耳の付いた黒いパーカーを着て、ヘッドフォンをつけた白髪の少年。
影で世界が少しずつ、運命が動き出す。

Prologue

――――「愛の反対は憎しみではありません。無関心なのです」
《マザーテレサ》。

◆

――《世界の終わり》と呼ばれる事件。いや、災害と、呼ぶべきなのだろうか。

《世界の終わり》と呼ばれる災害は、一言で言うなら人類をデータ化、つまり人体をホログラム化されたという今までに前例のない、在り得ない現象のことだ。
その内、データ化されなかった者も居たらしい。
その人間たちの事を、我々は禁忌（タブー）と呼んでいる（理由は人間らしくない者・・・つまり脳に異常が在る者や、異常者ばかりだからだ）。
あまりにも前例がない災害だった為、その時の状況を説明するのは難しいが・・・。
1人の科学者は、この災害をこう述べている。

――――「コレは神から我々人類に対しての天罰なのだ」。

◆

学校帰りの途中、冷たい雨が頬に当たった。
雨が上がるまで待つうち、更に激しくなった気がする。
どうしようか――――このままじゃ家に帰ることが出来ない。
携帯端末の天気予報情報を見て、雨が上がりそうにない事を確認し、溜息をついた。
傘は持ってきていない。
かと言って勝手に傘を借りていくのも――――。
そんな事を考えていると、空を見上げると雨雲と、そして何か――――光っている物体に気が付いた。
ユーフォー？すると段々とその光は近付いてくる。
途中で。
ユーフォーではない事に気が付く。
そして、それは決して落ちてきているのではないことにも気が付いた。

――――バッ・・・

「ッ・・・！？」
「ハッ・・・」

建物――――つまりは校舎なのだけれど。

校舎の屋上から、目の前に降り立った白髪に赤い眼の少年。
何かの耳の付いたパーカーを着ていて、耳にヘッドフォンらしき物を付けているのがチラッと見えた。
重力でも操ったように、目の前に、フワリと降り立つ。

「あ」
「あ」

俺達は交互に顔を見る。

――――瞬間。

「待てッ！」
「あ」

――――タンッ

地面を蹴り上げた瞬間、少年の身体はまたしても重力の法則を逆らったか如く、今度は別の建物に跳んだ。

「ノーマル(いっぽんじん)か。早く帰りなさい。ここは次期に、修羅場になるぞ」
「・・・・」

俺は無言で、その人の言うとおり真っ直ぐ家に帰った。

――――――帰らなければ、何かが戻れない気がしたからだ。

――――――《Ｉｔ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｓ．》

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

プロローグは短いですが、これから長くしていきたいと思っています。
これからよろしくお願いします

1―1　「白髪の少年」

冷たい雨が頬を伝う。
少年は何かを、鬱陶しそうに呟くと自らの手のひらを見た。
フラッシュバックする、忌々しい記憶。

『×××。お前、――――』

眼を閉じて息を吸う。大丈夫、何時もどおり、自分は死んでいる。

『・・・かぁ、さ、ぁ、』
「・・・うるさい」

振り向かずに少年は黒い、影の様な存在に言う。
黒い影の様な物はクスクス笑い、少年をあざ笑っている。

「・・・消えろよ」

少年が低い声でそういうと、黒い影は消える。少年は、何も言わずに朝日を、作り物の太陽を見届けた。

◆

「ハァ・・・捜査、ですか」
「あぁ。だからどうか黙っててくれないかな？昨日の夜のこと」

俺が下校している途中に男は突如現れ目の前でタバコを吹かして警察と名乗った。
彼も自分達と同じ《データ化された正常な人間》だ。
どうやら昨日の夜の一件を忘れて欲しいらしいけども。
まぁ、俺は事情聴取らしい物を軽く受けていた。

（・・・口止めして欲しい、って事だよな）

「・・・別にいいですよ。俺には関係ないことですから・・・」
「そうかそうか。悪いな・・・。だが、君を護るためでもあるんだ」
「・・・？」
「じゃーな。また会う事の無いようにな」

そういってその男は名前を名乗らず去って行った。
名乗るぐらいはしていって欲しいものなのだけれど。
すると遠くから手を振る友人に気付く。

「おーい。何してんだ夜人（やと）」
「・・・普通に学校の帰り」
「じゃあさっきのおじさん誰？」
「見てたのかよ・・・」

俺はカイトの顔を見ずに溜息をついた。
カイトは何時もの無邪気な笑顔で俺の肩に手を置いた。
カイトの長く黒い髪を見て、更に溜息をつく。

「何だよ、人の顔みて溜息つくの止めろよ！」
「・・・何でも無い」
「・・・あ、そ・・・。うぇっ・・・やっべぇもうこんな時間か・・・ッ」

カイトは時計を見て急ぎだした。
時計もまた、ホログラムで出来ているため薄い明かりが灯されたようになっている。
その時計の時刻は、既に６時を回ろうとしていた。

「俺ッ・・・今日は早くかえんないよ母さんがうるせぇんだよっ・・・。また明日だ！じゃーな！」

元気良く走り去ったカイトの後姿を見ていると、天候プラネタリウムプログラムが夜に変更され、空にはもう夜空が広がっていた。
空も星も、既に本物ではない。人工的に、作られたものだ。
人類が、生き延びるために。

――――ブゥンッ

俺の手のひらにはホログラムで構築された携帯端末が現れた。
ニュース情報を何となく眺めながら帰り道を更に歩いていると、速報が流れてきた。

（《バグによる連続被害事件》・・・。バグ、）

《世界の終わり》の災害によってデータ化し、《現象》として現れたのがバグと呼ぶ存在で、形がない物や人型の物、動物の形の物など色んな形をしている。
ある科学者の一説によると、《バグ》は神が人類を行き過ぎないように制御する神の使いだと表現している者が居るが・・・。
《バグ》はデータ化された人類を喰らう物や、破壊だけを行うバグが居るが、友好的なバグも数多く居ると聞くが普段の生活で見受けることは無い。
そう、普段の生活では、だ。

『グギャァァァァァァッ！！！』

「ッ！？！」

叫び声が背後から聞こえた瞬間、同時に背後で『ドガァァァッ』と言う破壊音が聞こえた。
後ろを振り向くと、1人の――――。
白髪の少年が俺の前に、化け物から俺を護るように立っていた。

俺は座り込む。
情けないが腰が抜けたという奴だ。
そのとき、俺は一瞬世界が終わったかと思った。
この場合、俺の世界が終わったかと思った、が正しいのかもしれない。
何とか心臓に手を当てる。
心臓は、やや速いが順調に音を鳴らしていた。
呼吸をしてみる。吐息と共に息は吐かれる。
生きている。まだ、俺は生きている。大丈夫、だ。
顔を何とか、俺は上げた。

「・・・」

そして白髪ヘッドフォン猫耳フード少年は、右手を変化させた。
右手には、粒子を溢れさせるバッドが握られていた。

「じ、実体化ホログラム・・・！！？」

――――ダンッ

少年が跳躍する。

――――――ガァァァァァァンッ

空気が大きく振動し、化け物は叫び声を上げながら倒れこんだ。
化け物は粒子となって消えて行き、跡形も無く消失した。
少年が右手に持った実体化ホログラムのバッドを改めてみて、チートされたプログラムだと認識する。
この場には簡単に化け物を殺した少年と、その少年を呆然と見つめる俺だけが残った。
何なんだ。この状況は。
なんなんだ、あの化け物は。
そして、この少年は――――――何故、俺を助けた。
・・・いや、もしかしたら彼は先ほどの化け物を倒す事が目的で、俺を助ける事が目的ではなかったのかもしれない。
偶然、俺がここにいただけで、偶然、俺が助かっただけなのかもしれない。
少年は無言で俺を見る。
俺は腰が抜けたまま、少年を唖然と見る。

「き、」

先に喋りだしたのは俺で、慎重に言葉を紡いだ。
少年が敵なのか、仲間なのか判らないこの状況下だからだ。
昨日出会った少年は、不思議そうに首をかしげており、猫耳の付いたフードが傾きによって揺れた。
その少年が昨日の少年だという事を落ち着いた今、ようやく思い出

す。
思考をクリアに少しずつしていき、ようやく言葉らしい言葉を、俺は発した。

「昨日、の」
「・・・昨日・・・」

思い出したように顔を歪め、少年は右手から実体化ホログラムを消す。
ホログラムは粒子となって空に消えて行った。

「あ、アレ、」
「・・・《バグ》だ。人喰いタイプだったから駆除した」
「キミは――――」
「・・・僕は」

少年は猫耳の付いたフードを外し、俺に見せる。
白髪に、赤色の眼で、俺と会話している最中もヘッドフォンを付けたままだ。
この状況でヘッドフォンを外して喋れという常識は皆無だろう。
化け物、《バグ》が立っていたその場所に、少年は立つ。

「お前ら《ノーマル》の言う、《禁忌》だ」
「禁忌（タブー）・・・！？」

《禁忌》と呼ばれた少年は、薄く息を吐き、俺を何の感情も無い眼で、無表情で、俺を見つめた。
俺は、その視線を外す事は、出来なかった。

◆

「禁忌(タブー)が脱走しただと？」
「・・・申し訳ありません。私どもの不注意でした・・・。まさかあそこまで力があるとは・・・」

暗い、どこかの客間らしき場所で、六人ほどの男が集まっていた。
一見高級そうな客間である。
背後でソファーに座る男がクククッと笑い出し、その笑い声に怪訝に顔を歪める1人の男が問う。

「何が可笑しい？クレア」
「面白いじゃねぇか。その禁忌(タブー)。強いんだろ？強い奴は、俺はスッゲェ好きだけどな」
「・・・戦闘マニア(バトルマニア)が」
「・・・クレア。ではお前が禁忌(タブー)を捕まえにいくといい。殺しはするな」
「わぁってるよ。ソコは十分承知してる。手加減してやるっつぅの」
男はそういうとソファーから乱暴に立ち上がり、不気味に笑う。

――――ブゥゥゥ、ンッ・・・ジジッ・・・

男の左手に、マシンガンの様な機関銃が現れた。これも実体化ホログラムの一種だ。

「じゃあ、ちょっくら手加減して戦ってきてやるよ」

1―1　「白髪の少年」（後書き）

明らかにやっぱり短い・・・（汗）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6241y/

浸透世界のデリット

2011年11月20日19時31分発行